



— 第62号 —

〒214-8565  
川崎市多摩区西生田1-1-1  
日本女子大学教育学科の会  
電話 044 (952) 6870 (代)  
FAX 044 (952) 6889  
ホームページ  
<http://jwu-gakuen.net/>  
メールアドレス  
[info@jwu-gakuen.net](mailto:info@jwu-gakuen.net)

### 「教育学科の会 第五十二回大会」の お誘い

会長 澤本 和子

## 第五十二回「大会」のお知らせ

日 時：平成二十五年五月二十五日(土)  
午後十二時三十分～三時三十分

会 場：日本女子大学人間社会学部  
A棟二階第一会議室  
(西生田キャンパス)

### 大会日程

- 第一部 総 会 (午後十二時三十分～一時)
- ・ 会長挨拶
  - ・ 平成二十四年度事業報告および各部報告
  - ・ 平成二十四年度会計決算報告・監事報告
  - ・ 役員改選・承認
  - ・ 平成二十五年度事業計画・予算審議
  - ・ その他

第二部 第十七回「学縁の集い」  
(午後一時～三時三十分)

### 参加される方へ

準備の都合がありますので、同封のハガキで五月十日(金)までに  
出欠をお知らせください。



例年の行事ですが、おひとりでも多くの卒業生と在校生の皆様の参加を願ひ、ご案内をいたします。

大会は、第一部「総会」と第二部「学縁のつどい」で構成されています。総会は、この会の実績を会員の皆様と共有し、これからの活動方針を決定する大事な機会です。また、第二部「学縁のつどい」では、卒業生や在校生の参加を企画しています。この機会に、大会後に同期会や同じゼミのクラス会などを企画して頂くのも有難いです。

詳細は、日本女子大学教育学科の会ホームページ (<http://jwu-gakuen.net/>) をご覧ください。内容の詳細が決まり次第アップいたします。内ふるってご参加を頂きたく存じます。



※西生田キャンパス入構に際しては、身分確認用として、葦送付時の封筒をご持参ください。

※交通のご案内は5ページをご覧ください。

### 提言

## 女子教育と『国際ガールズデー』

教育学科助教 山澤 和子

私は今から三十年ほど前、中東のイラクに、二十年ほど前にパキスタンに在住していた。両国共イスラム圏で、女性の識字率が最も低い国々である。在住後、三十年以上経過した現在においても女性の地位の低さは当時と変わらず、多くの女性達は学ぶことを望んでいない。

二〇一二年の十月、女子が学校に通うのを禁じ、女学校を破壊しているパキスタンの武装勢力が、スクールバスに乗り込んだ。そして彼らの活動を批判しパキスタン政府から平和賞を受賞した少女を銃撃したのである。幸いにも少女は一命は取り留め、一月に女性の権利向上の取り組みを称える、フランスのシモーヌ・ド・ボワール賞を受賞した。

しかし、その事件からわずか三カ月後の二〇一三年元日に、パキスタン北部で武装勢力からNGOの女性教員が数名射殺されるという事件も生じた。事実、中東に限らずアジア、アフリカなど現在も多くの国々で女子教育が迫害されているのである。

このような世界状況の中で、昨年十月十一日に第一回『国際ガールズデー』が開催された。経済的・社会的理由で教育を受けることのできない女子の地位向上のために国連が制定した国際デーである。第一回のテーマは『児童婚』である。発展途上国では女子の児童婚が多く、望まない早期妊娠は彼女達の健康の危険を伴うばかりでなく、教育を受ける権利さえも奪っている。通学することは、女子の早婚を減少させる効果があり、教育の担う役割は大きい。

私は、女子教育への理解を広げるために次のことを提言する。第一は、『国際ガールズデー』を機に世界に目を向けることである。第二は、成瀬仁蔵先生が唱える『人として、婦人(女性)として、国民として』教育を受けることの意義と幸せを以前にも増して重く受け止め、私達自身の学びをさらに深めることである。

何故なら、女性が教育を受け知識を得ることは、世界平和に繋がるからである。

## ホームカミングデー 講演会の報告

昨年十月二十日(土) 森田伸子先生  
(教育学科教授、専門は教育哲学・  
教育思想史・前教育学科の会会長)  
の講演会が、西生田で開催されまし  
た。山下絢先生(教育学科専任講師・  
専門は教育行政学)の司会で在学生、  
卒業生、教職員の方々が多数参加さ  
れ、今を生きたるための本質的な問い  
や、智慧の詰まった熱いお話に一同  
大いに動かされました。



「いま、哲学を——生きること、  
希望することを学ぶために——」

先ず二〇一二年十月という今とは何  
か？

東日本大震災後であり二一世紀であ  
る。科学が進歩し発達すればする程良  
くなるという思想——一八世紀の欧州で生ま

れた進歩思想で基本的に今までやってき  
た。途中公害問題等が出てきたが、科学  
がより進歩すればその問題も克服でき  
ると信じてさらに開発を進めてきた。今、  
東日本大震災と原発事故は、今後その  
思想で進むべきか否かを我々に問うてい  
る。あれだけの震災が起こることを予測  
できない科学が、一方でそれ以前とは比  
較にならない効率の良い原子力発電とい  
う高度な装置を作った。これまでの科学  
は、非常に不均衡な発達をしてきたとい  
える。自然災害という不可避のものに対  
し、人間は全く無力であるから、人間の  
生存という原点を考える科学はないのか  
と問うとき、宮沢賢治の「グスコープド  
リの伝記」を思う。人間が人間の尊厳を  
懸けて飽く迄も進歩させていこうという  
夢を描くならこういう夢を描くべきだ。  
生きるという無限の原点を保障していく  
ものとして科学が総結集していくこと無  
くしてこれからの科学は無いのだから。



次に生きる事、希望する事と  
は何か？

フランクフル(心理学者・精神  
分析学者・ユダヤ人で強制収  
容所に送られた)は、その著書「夜と霧」  
の中で、明日はガス室に送られるという  
人が、美しい夕焼けを見て「世界は何故  
こんなに美しいのだろう」と言い、そこ  
に居た人達もまた共感したという事を書  
いている。絶望的な時も夕焼けを見て美  
しいと思える人間である事、仲間と夕焼  
けの美しさを共有できる其の事が希望だ  
といえる。今この瞬間人間としてある事  
の喜び・価値に気づく事、それが希望の  
根源である。



三番目に、哲学とは何か？

学問として細分化・精密化し、  
カントやハイデガーに代表さ  
れる多くの難解な書物があり、  
そうした「テキストの読解としての哲学」  
が、今まで一般に認識されてきた哲学と  
いえるが、ここでは、実践としての哲学  
を考える。(ヨーロッパ)の哲学とは、  
本来「智を愛し求める」素朴な気持ちか  
ら始まったものである。——当初その眼差  
しは自然界に向けられ、それは自然科学  
として発展し、次にソクラテスがその関  
心を人間自身に向けた——哲学者でなく  
も、存在する事の意味を人は皆考えるも  
のであり、人間とは哲学せざるにいられ  
ない存在であると言える。

近年、あらゆる場で人々が様々な事項  
の意味を考える時、「哲学する」という  
言葉が使われるようになった。そこで「哲  
学を学ぶ」という事が、「生きる事・希  
望する事を学ぶ」事と繋がっていくと考  
えられる。哲学者達が、人々が生きてい  
る現場で共に哲学するという事が現在盛  
んに行なわれているが、その初期に行わ  
れたのが医療現場であったのは意味深い  
事である。



四番目に、哲学を学ぶとは  
どういう事か？

存在の意味・根源的な意義を  
問うという事が人間にとって  
本質であるなら、そこには専門家も素人  
もなく、皆共通の基盤に立っていると  
言える。この時、哲学者がそこに介入す  
る必要はないように見える。それにも関  
らず、実践哲学の現場において哲学者が  
そこに介入する意味はあるのか。例えば

医療現場で、看護師さん達が自身の経験  
を整理し考えていく時その手助けが出来  
るところに意味がある。哲学者は  
簡単に答えを出すのではなく、専門的な  
仕方順番に過程を辿って行く。様々な  
状況を考えて非常に慎重に執拗に、根気  
良く、粘り強く結論に導いて行く。この  
粘り強さに学ぶ事は多い。人生とは、答  
えを出して実践しなくてはならない場面  
の連続であるが、安易に「絶対に正しい  
唯一の答え」として歩み出すのと、熟慮  
の末、「別の考え方・見方があるが、ひ  
とまずこの結論を出した」として歩み出  
した一歩では、大きな違いが出てくる。  
哲学にとって重要なのは考えるところに  
よって、「生きていく事は一筋縄では行  
かない、だから面白いのだ。」と思える、  
そこに哲学の役割がある。



最後に、子どもへの哲学教  
育とは？

今、若い哲学者達が、小・中  
学校で哲学の授業を行なっ  
ている。デュロイの系譜を引くリップマン  
が、哲学教育を最初に提唱し、現在世界  
中で実践されている。最も盛んなのは  
オーストラリアで、とりわけ効果が視  
られたのは、所謂問題校であって、この事  
は非常に示唆的である。この哲学の授業  
は、探求の共同体(探求する共同体)と  
よばれる形で行われる。子どもの場合は  
特に、一人でするのではなく、子どもた  
ちの問いを導いていくファシリテーター  
としての教師と共にする。哲学のテー  
マは皆共通して持っている問題であるか  
ら、教師と子どもはその問題に関して平

等であり、共にそのメンバーである。しかし、教師は既にその問題に関して『考えた事があるが、やはり判らない』という事が判っている。「人でなくてはならず、ここに両者の重要な違いがある。ここでは、誰か偉い人がこのように言ったというような、権威に基づく証言は認められない。また、発言する事よりも、相手の言葉を正しく理解する事がこの教育の最大の目的である。授業では、相手の言葉を正しく受け止める為に根気良く問い返していくが、問い返し方の様々な実例がある。更に正しく理解する為に、言葉の定義の確認も不可欠であり、これらは大人の世界でも重要で、民主主義の基盤となるものである。

人は言葉に拠って繋がっている。人が、自覚的により良く繋がるように工夫、実践、練習をし、訓練をするのが哲学の授業であると私は思う。

\*\*\*\*\*

講演後、意義深い質問や意見が出て、参加者一同更なる探究心を掻き立てられながら、名残惜しくキャンパスを後にしました。



【総務部 渡邊 明美 (27回生)】



## 学ぼうシリーズ

### 子どもの生まれ月

#### ― 相対的年齢効果をめぐって

教育学科専任講師 山下 絢

ある母親同士の会話から。「うちの子は1年生の時リレー選手ではなかったけど、4年生からはずっとリレー選手よ」「そうなの？うちの子は4年生まではリレー選手だったけど、それ以降は全くだめなの。もっと練習するようにいわなきゃだわ」

このような会話の後は、努力の結果として「練習、がんばったんだね」と子どもを褒めたり、あるいは「ゲームばかりしていないで」もっと練習をがんばりなさい」と子どもに努力を促すようになりがちであると思います。しかし、「リレー選手」になれる結果は、必ずしも本人の努力の帰結だけではなく、別の要因によっても一部が説明可能です。その要因として議論されているのが、「相対的年齢効果」と呼ばれる理論/概念です。この相対的年齢効果が注目されているのは、個人の努力や練習量以外の生得的要因によって、個人の成果が説明されるという点です。

相対的年齢効果とは、簡略して述べれば、いわゆる早生まれの子ども(日本の場合では、1月から3月生まれ)が学力や教育達成、スポーツ面などにおいてポイントが低いことを表す概念です。例えば、プロ野球選手やサッカー選手の場合では、早生まれの人の割合が少ないこと

が指摘されています。さらに、慶應義塾大学の調査グループによれば、学力においても、生まれ月を起因として学力差が生まれていることが指摘されています。具体的には、生まれ月以外の家計要因(年収、親の学歴、就業形態など)の条件を同じにした場合、数学(算数)・国語において、早生まれの得点が少し低くなっていることが指摘されています。

以上の指摘は、本人の努力とは関係のないところの生まれ月という生得条件によって、スポーツにおけるパフォーマンスや学力が説明されることを指摘しているものです。このような相対的年齢効果が確認される状況をどのようにとらえていくべきでしょうか。実際に生まれ月を考慮した対応としては、低年齢時における入学試験の一部で、生まれ月を考慮した選抜試験も行われています。また政策上への提言として「Gladwell (2008)は、生まれ月に基づく学級編成を提案し、「同じ成長のレベルで学ばせ、競わせればいい。[中略]自分に責任はないのに教育制度のせいでは不利な思いをしてきた子どもたちに、公平な機会が与えられる」(Gladwell 訳書, 2009, p.39)と指摘しています。これらの教育制度上への提言は、機会の平等の観点から、早生まれの子どもが相対的に不利にならないための教育上の条件整備の必要性を問いているといえると思います。



### 〈文献案内〉

- ・ 赤林英夫・中村亮介・直井道生・敷島千鶴・山下絢 (2011) 「子ども」の学力には何が関係しているか」樋口美雄・宮内環・C.R. McKenzie 慶應義塾大学パナールデータ設計・解析センター (編) 『教育・健康と貧困のダイナミズム』慶應義塾大学出版会、pp.69-98
- ・ 川口大司・森啓明 (2007) 「誕生日と学業成績・最終学歴」『日本労働研究雑誌』49 (12) pp.29-42.
- ・ Gladwell Malcolm (2008), Outliers: The Story of Success, Back Bay Books (=2009 勝間和代・訳 『天才！成功する人々の法則』講談社)



学ぼうシリーズの題材のリクエストを募集しています。最新の情報を知りたい。昔の様子を知りたい。教育現場の方から。現場を離れた方から。教育学科の会ならではの、あらゆる角度からの「教育」に関する疑問・質問をお寄せ下さい。



### 懇話会の報告

#### 内山 眞理子さんを迎えて

#### 「タゴールと森の学校」



二〇一二年十二月一日(土) 目白キャンパスに、教育学科の二十二回生でタゴール研究家の内山眞理子さんをお迎えして懇話会を行いました。内山さんの謙虚なお人柄と、真摯な研究の様子がうかがわれるお話をしました。四十四名の参加を頂き、質問や意見交換などが活発に行われ、タゴールへの関心の高さが感じられました。一部抜粋してお伝えします。



#### \*タゴールの詩歌との出会い

昨年二〇一一年はタゴール生誕百五十年にあたり、世界でいろいろ催しがありました。日本女子大でも、「タゴールと日本女子大学」と題して記念の会が、成瀬記念講堂で今年四月二十一日に行われました。東日本大震災、福島原発事故など困難な時代が続いている今、タゴールの詩や歌に触れるたびにあらためて心深く励まし勇気づけられるように感じます。私がタゴールの詩と出会ったのは山口の高校生の時でした。小さな本屋さんで山室静訳「タゴール詩集」を見つけました。山室静はアンデルセンやムーミンの訳者として有名ですがタゴールの紹介者の一

人でもあります。詩集のページを開いたとき、純粹で清らかなものが、大きく優しく包んでくれたようで、私はとても気に入ってしまいました。タゴールは大自然との一体感にあふれる詩を数多く作っています。大自然を、さらに宇宙を生命の輝きのなかにとらえ、生の観点からすべてを見つめました。タゴールは「いのち」への賛歌を歌い続けた詩人です。

#### \*森の学校

タゴールは、一九〇一年にインドのベンガル州のシャンティニケトン(静寂の住処という意味)に森の学校を創設しました。アシユラム(修養道場)学校として創始されたのです。タゴールは、通ったどの学校にもなじみせず途中でドロップアウトをしました。学校で幸せを感じるものがなかった記憶こそ、タゴールが理想の学び舎をもとめてやまなかった理由の一つです。森の学校のめざすものは、大自然は人間にとつて最良の先生というものでした。最初は先生六人、生徒が五人でしたが、タゴールはこの学校のために心血を注ぎ、開校以来ヒューマニズムに基づく異文化理解と調和を目指しました。「人間であることの意味を世界全体のなかに見つける」。この精神は森の学校に結実しました。この学校のことを、My Schoolというエッセイに書かれています。

アシユラム学校は二〇年を経て、Visva - Bharati (ベンガル語読みでビツショ・バロティ、ヴィシュヴァ・バーラティ、タゴール国際大学)に発展し、インド独立後に国立大学になりました。一九二二年にはこのシャンティニケトンの地に隣接するシュリニケトン(繁栄の住処)に、農村再建学部を創設しました。

国際的文化教育センターとしてのシャンティニケトンと、地域農村教育センターとしてのシュリニケトンが二つの柱となつてVisva - Bharatiを構成しているのです。

#### \*タゴールと日本女子大との結びつき

ここで、タゴールと日本女子大との結びつきについて、お話ししましょう。一九一六年七月、日本女子大学の創始者成瀬仁蔵の招きにより、タゴールは目白で講演し、さらに後日、軽井沢三泉寮で六日間を過ごします。大樫の樹の下で、瞑想の講義をしました。タゴールの講義に耳を傾ける学生たちに全幅の信頼をおいての講義であったことを確信し、そのことを思うたびに私は胸が熱くなるのを感じます。詩人が語りかけた真実というものについて、さらに真実を感じることについて、学生たちは全身全霊で理解したと私は確信するものです。詩人は軽井沢に非常な親しみを覚えたようで、「私はなぜもつと早く軽井沢に來なかつたのだろう」という言葉も残しているくらいです。また、送別会の折には、「いと小さきこの会合が将来の偉大なる力を造るべき意味深き種子の蒔かれる時であることを思ふ」と話したそうです。

#### \*結びに代えて

タゴール精神によつて創始された英国ダーティントン・ホール学校でのタゴールフェスティバルが、昨年五月に七日間にわたつて開催されました。が、三月に起きた東日本大震災のために私は行くことができませんでした。そうしたところ今年も開催されることを知り、この四月に行つてまいりました。四日間にわたつて、インド舞踊や音楽、タゴール舞踊劇、タゴール歌が早朝から夜遅くまで演じられました。

タゴールはその生涯において数多くの詩歌をつくり、二十世紀初めに森の学校を創始して、英国統治下のインドの人々に自立への夢と希望をあたえました。困難にあつても真実を見つめ、そこから希望を見出すことの大切さをタゴールは語り続けました。その普遍的精神は人々の心を引きつけてやみません。最後にタゴールの歌「よるこびは天地万物を」(タゴール歌詞集Gitanjali所収 内山眞理子訳)を紹介しましょう。

よるこびは天地万物をめぐり流れ／アムリタの露は昼も夜も無窮の空に満ちあふれる／太陽と月は両の手のひら一杯にアムリタを飲みほし／きらきらと輝く光は尽きることがない／地上は生命と輝きにつねに満ちあふれている。

あなたはなぜ、じつとしたまま／自分のことばかり思いわずらうのですか／心をひらいて四方(よも)を見つめてください。こまごまとした悲しみを、ささいなものど知り／無為の生命を愛で満たしてください。

#### アンケートより

・タゴールが日本女子大に來校していたことなど全く知りませんでした。女性教育がまだ必要とされていない時代に、学生に瞑想を教えたことなど驚きでした。女性に対する尊敬の気持ちがあることになってきたのですね。ありがとうございます。

※「野の風」二十二号 内山眞理子「行動する詩人タゴール」 「タゴールとダーティントン」、東京新聞世界の文学イン

ド記事(2011.4.28)より一部抜粋させていただきます。

森田伸子先生の退任に寄せて



印象に残っている事を教えてください。

ひたむきな学生に恵まれたことです。長い間に学生のタイプは変化しましたが、真面目さや真摯さはずっと変わりません。思想哲学の分野で非常勤をお願いしている先生方も同じようにおっしゃいます。

教員生活で大切にできたことを教えてください。

多くの人が教育を語るが、その捉え方はステレオタイプで綺麗事であることが多いです。本質的な問いで、学生の固定観念に揺さぶりをかけ、教育について改めて考えてもらおう、それが大切にしてきたことです。教育はたった一つの正しい答えがあるわけではない。教育という営みは教師や親の決断の積み重ねです。その決断が正しいものかどうかは、一生をかけても分からないかもしれない。決断の際、より深く豊かな捉え方を持つていなければならない。その決断は一面的ではなくなります。そういうものを用意するのが学問です。学生は、ある理論を提供す

ると、それこそが正しいと考えてしまうことがある。正解を出すのが学問ではないのです。

なぜ教育学を志したのですか。

高校までの教科以外を考えると、残ったのが哲学と教育学でした。哲学は理屈のイメージでしたが、教育学には人間の匂いを感じました。どう生きていくかとか、人間を教育するとはどういうことなのかを学べると思ったのです。でも、お茶大の学生のほとんどが就職希望で、私は浮いていました。そんな私にとり教育学の古典であるにも関わらず、実は教育に失敗しているルソーは興味深く、研究をしたいと思いました。院では他専攻受講をして仏文科の授業でルソーを読んだが、テキストを歴史的、社会的、実践的な観点から考えるという点で不足を感じました。ルソーのテキストをダイナミックに教育的な視点から見るのがやはり面白く感じました。教育学を選んでよかったと思います。

学生にメッセージをお願いします。

うまくいつているかのような人生でも、一歩進めば崖下に転落するかもしれません。時代に関係なく人間は脆いものであるとルソーも言っています。アイデンティティと言っても、事故で記憶を失ってしまうかもしれない。生きること、その脆く儂い存在であることを引き受けるといことです。そういうところから、色んなことの価値を知ってほしい。ペシミスティックのようだけど、最後は皆同じなのだから。その人の人生はその人にしかありません。他人との比較の中

で一喜一憂することはあるでしょう。でも人間の共有する儂さという根底のところに戻って物事を見ることも大切です。哲学は役に立ちます。難しい理論を学ぶというのではなく、自分の人生を生きやすくするための自由な発想を持つて生きて欲しい。宇宙の何十億年という長い歴史の中で、生きていると実感できる存在人間であることは、すごいことです。そう生まれてきたことを十分に味わい尽くして生きていくことを考えれば、色々なことを気楽に受け止められるかもしれません。

ありがとうございます。

一年生の頃より尊敬している先生にこうしてお話を伺えたこと、大変幸せに思います。



【学生委員三年 芦野 恵理】

教育学科の会より

回生委員会にぜひご出席を

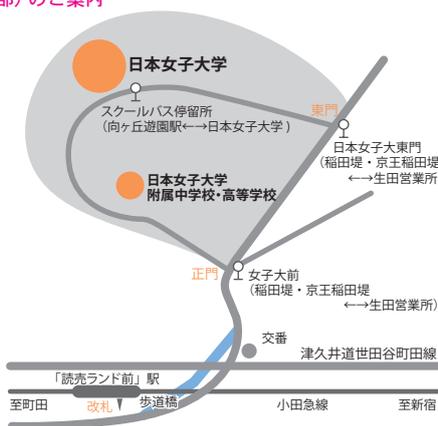
日本女子大学教育学科の会は在学生、卒業生、先生、元先生によって構成される会です。各回生ごとに選出された回生委員によって総務部、会計部、会員部、庶務部、会報編集部(「葦」の編集をしています)、文化部、回生委員会部の各部分かれて活動し、年3回の回生委員会で話し合いをしています。

回生委員会では各部の活動について話し合うばかりでなく、講演会などもあり相互に学習できる場にもなっています。この回生委員会では名簿を作成し、各回

生委員にお知らせを発送していますが、名簿に登録されていない回生があり、お知らせが届けられていないことがあるのが残念です。お知らせが届いていない回生委員(とくに8回生、11回生、15回生、17回生、21回生、29回生、40回生、50回生、52(62回生)の方はご住所、お名前を「葦」に同封されているはがきにその旨をお書きになってお知らせいただくと幸いです。また、回生委員会に出席されたい回生委員の方はお忙しいとは思いますが、ぜひご出席をお願いいたします。お待ちしております。

【回生委員会委員長 萩野厚美(25回生)】

交通のご案内



西生田キャンパス(人間社会学部)のご案内

- 【小田急線】『読売ランド前』駅下車/徒歩約12分 新宿→読売ランド前/急行25分 (『向ヶ丘遊園』乗り換え)・準急30分 『向ヶ丘遊園』からスクールバスあり
【京王線】『京王稲田堤』駅下車/ 小田急バス(生田営業所行) 約12分/ 日本女子大東門または女子大前下車
【JR南部線】『稲田堤』駅下車/ 小田急バス(生田営業所行) 約12分/ 日本女子大東門または女子大前下車

# 会員の広場

## 女性のネットワーク活動と被災地支援

島野 正子 (16 回生)

### 1. 東松山女性のネットワークの誕生

私が生まれ育ち、そして今も生活している東松山市は埼玉県のほぼ中央に位置し、児童文学『天の園』の舞台ともなった景色の美しい住みやすい土地柄です。そういう地域であるからこそ、因習も根深く、人間関係には固定したものがありません。私も女性が置かれている現状にしばしば苦しめられてきた人間のひとりです。ただ愚痴を言っている問題も解決しません。仲間たちと一緒に活動やおしゃべりの中から、男女共生をめざすネットワークをつくらうとの声がおこったのは平成8年のことでした。そのきっかけとなったひとつは、以前、「葦」で報告させていただいた埼玉県の女性の海外研修に参加した私の体験です。もうひとつは同年、隣町にある国立女性教育会館で開催された「国際家政学会プレコングレス」に、多くのグループが実行委員会をつくって支援・協力したことです。

これらの経験を下敷きに女性が力をつめるためのグループとして「東松山女性のネットワーク」が誕生したのです。私が初代代表となり、10年間の草創期を乗り切りました。女性を冠につけていますが、男性たちも仲間に入り、まさに男女共同参画をめざしたネットワークとなりました。

### 2. 東松山女性のネットワークの活動

#### ① 情報紙の発行と定例会開催

情報紙「耳をすまして」を毎月発行し、本年中には200号になります。執筆者は多彩で、市議会議員のエッセーはじめ、事業の予告や報告、感想や自由投稿など、バラエティ豊かな紙面をつくっています。編集を担当していますが、原稿集めと校正は大変です。しかし、執筆者の人となりや多様な視点に出会える役でもあるので楽しみでもあります。

月1回の定例会ではさまざまな情報交換が行われ、さらに相互支援と学習会等を通して、女と男、市民と行政、ハンディキャップのありなしなどを超えて、パートナーシップが広がり、深まりつつあります。県や市の職員が、夜、市民グループの会合に毎回出席することなどは非常に珍しいことではないでしょうか。これも長期間かけて築いてきた信頼関係の賜と思っています。

活動の記録として、毎年3月には「活動報告書」を作成し、1年の成果をまとめて関係者に配布しています。市立図書館では、ネットワークの報告書を製本して地域資料の中に入れ、自由に閲覧できるようにしています。

#### ② 「ゆつくりウォーク」の誕生と発展

東松山市では毎年11月の3日間、日本スリーデーマーチという国際的なウォーキング大会が開催されます。私たちは「誰にも住みよいまちづくり」をめざす中で、車いすやベビーカーで参加したい方たち、さまざまなハンディキャップをもつ方たちに、その機会を提供すべきだと考えるようになりました。ノーマライゼー

ションの視点でまちを歩いてみると、道路も公園も役所も商店も障害者に優しいとはいえません。そこから、バリアフリーのまちづくり活動が始まりました。

まず、スリーデーマーチに車いすでするコースを設定し、ゆつくり歩こうねという意味で、「ゆつくりウォーク」と名づけました。はじめはネットワークの孤軍奮闘でしたが、現在では他グループや行政と一緒に実施しています。中高校生のボランティア養成にも力を注ぎ、社会人になっても「ゆつくりウォーク」に馳せ参じる若者がいることは、とても嬉しく、誇らしく、十数年間、やり続けてよかったと思っています。



#### ③ ネットワーク所属グループおよび個人への支援活動

ネットワークには現在14のグループと個人が所属しており、ゆるやかなネットワークを結んで「できる人が、できるときに、できることを」するというコンセプトで活動しています。また、グループおよび個人が「誰にも住みよいまちづくり」のためにイベント等を実施する際には、できるだけ相互支援を行うということにしています。会費は集めておりません。情報紙に載せる広告代と寄付、フリーマーケットの売上金などが資金源です。広告を出していただける方がありましたら、ぜひご協力ください。

### 3. 震災被災地への支援活動

平成23年3月11日、東日本を襲った地

震と津波と原発事故は私たちに深刻な命と暮らしの見直しを迫ってきました。はじめはそれぞれが支援の道を探り、できることをやってきましたが、男女共生関連のフォーラムをきっかけに、480世帯あった家が20軒しか残らなかったという宮城県東松島市野蒜(のびる)地区の女性たちのことを知りました。被災地訪問についてはずっと心にかかっています。なので、一大決心をして、昨年6月に有志で野蒜を含む宮城県の被災地を訪れ、惨状を見聞きしてきました。現地の女性たちから震災当時のこと、現在の生活などについて伺い、復興への道のりは長く厳しいものと痛感しました。帰ってきてから、私たちにできる支援は何かと知恵を絞り、目下「巾着袋プロジェクト」に取り組んでいます。プロジェクトは、ふとん組合はじめ大勢の方から寄贈された布地を裁断し、購入した紐と一緒に送って、野蒜の女性たちにリバーシブルの巾着袋に縫ってもらい、私たちが販売し、工賃と支援金を送るというものです。すでに3千袋縫ってもらっています。裁断して残った端切れを手芸用に包装し、これも販売を始めました。私は二人の孫とせつせと包装し、どこへ行くにも持ち歩いて販売しています。これも息の長い支援ができるよう頑張るつもりです。販売と布地提供にぜひご協力下さい。



#### 問い合わせ

電話(FAX) 0493(22)1468  
 メール: shimano@pop21.odn.ne.jp

# ハガキ コーナー



≪は編集部挿入≫

◆御盛会をお祈り申し上げます。

11回生 藤塚 雄子(神奈川)

◆近くの桜町病院ホスピスのボランティアをして10年。先頃、夫を呼吸器の病気で送りました。在宅介護、緩和ケアについてより深く思うようになりました。第61号葦にタゴールの記事がありました。とても懐かしく拝見しました。在学中、山室先生のゼミ(卒論は宮沢賢治)で、インド訪問された先生のお話しに感激した日を思い出しました。

12回生 津々良 明石(東京)

◆《ホームカミングデイ》当日は卒業5年の同窓会があります。残念ながら欠席させて頂いたきます。若年性の認知症(68歳です)の夫と同居しながら、気苦労の多い毎日です。教育学科で学んだことや、教師として35年間経験したことが、すべて介護の毎日役に立っています。毎日が全て学習のような気がします。これから皆様にお世話になりながら、生活していきたいと思えます。

12回生 押田 計枝(千葉)

◆《ホームカミングデイは》桜楓バザーと重なり失礼します。

18回生 佐野 寿美礼(東京)

◆昨年大病をいたしました主人が、お陰様で元気になり、22年前主人の仕事で滞在しておりましたドイツ南西部にありますフライブルグで旧交を温めてまいりました。

22回生 橋本 晴子(東京)

◆音訳ボランティア(視覚障害の方に広報や依頼本を読んで、テープやCDにして届ける)を始めました。アクセント、読み癖、文章の把握、難しさを痛感しています。自己向上の為の試練と思うことに。学生時代の特殊教育と実習(遠藤先生!)思い出します。61号に載っていた、江戸東京博物館ボランティアの加藤さん、ご近所なので是非伺います!

24回生 渡部 泉(東京)

◆第61号の葦は、今まで以上に刷新して読みやすかったです。懇話会の内山真理子氏のプロフィールを読み、12月1日が楽しみにになりました。同期の方に声をかけていきます。又、会員の広場での加藤さんご紹介「江戸博」でのボランティアということでした。これからもご活躍を祈っています。

25回生 藤田 良子(埼玉)



◆葦、楽しく読んでいます。退職後、年配の方に接することが多く、お話しをしたりするうちに、人には歴史があるというのを強く感じます。老後の生き方に迷う時、心強く参考になりたいと思えます。

26回生(香川)

◆中国との問題が、私の学ぶ太極拳の交流にも、大きな影をおとしています。西洋医学と中国医学が上手に混合する事で、健康の回復に大きな成果をあげるなか、たいへん残念に思います。また良き時が戻りますように祈ります。

26回生 高桑 厚子(東京)

◆ホームカミングデイで学生の皆さんと共に森田先生のお話を伺うのを楽しみにしています。教育学科の会のホームページをさらに充実させて、会員にとって、身近な会と感じていただけるよう、検討中です。どなたか手伝っていただける方はいらつしやいませんか?

☆源先生、「教育哲学」を心待ちにしています!  
26回生 大森 桃子(神奈川)

◆葦を楽しみに読ませていただいています。紙面がカラフルになり、楽しくなりましたね。

28回生 村部 奈穂子(東京)



◆いつもたのしく読ませていただいたいております。昨年よりフィンランドの教育施設を訪問する機会を得て、今夏(平成24年)も学校を中心に6ヶ所の見学をしてまいりました。学力世界一を支える合理的な考え方、取り組みの数々が印象的でしたが、モンスターペアレントの登場など、日本と似た状況があることも伺い、教師の働く環境についても考えさせられました。

33回生 尾崎 啓子(埼玉)

◆13年間離れていた宇都宮に戻りました。栃木県は車社会?市内には新しい道路ができ、新鮮な日々です。以前のボランティア仲間とも再会し、勉強会にも参加させていただき、この地に合った活動を再開できればいいなと思っております。あせらず、少しずつ!をモットーに。

33回生 竹内 さち子(栃木)



◆今年《平成24年》の夏に長男が生まれ、授乳におむつ替えに、不眠不休の毎日を通っています。この万般不足気味な感じ、大学2年の課題や模擬授業で忙しかった頃を思い出すな...と思っていたところに葦が届きました。卒業して社会人となり、妻となり、母となっても、様々な場面で大学時代に学んだことを思い出します。とても貴重な経験ができた4年間であったことを改めて感じています。

55回生 井澤 和美(神奈川)

◆学校行事で多忙な秋を過ごしています。運動会では大声で叫び、喜び、泣き、子どもと全力で向き合える「先生」のやりがいを感じている所です。久しぶりに生田の美しい紅葉をながめたいなあと思っています。学科の会の皆さま、どうぞご自愛下さい。

院卒 59回生 荏本 加奈子(神奈川)



◆卒業して3年の月日があっという間に経ちました。しかし、「あ、私は日本女子大学教育学科だったな」と、葦を見るといつも思い出せます。「大学時代の友人は、今、どんな生活を送っているのかな」とふと考え、連絡をとりたくありません。そんなきっかけになる葦をいつも楽しみにしています。

60回生 剣持 明日香(神奈川)

◆お久しぶりです。3月に教育学科を卒業しました海野です。4月の着任から早いもので半年が過ぎました。毎日毎日2年1組の26名の子とも達と一生懸命、色々なことに挑戦しながら頑張っています。今、私が全力で頑張っているのも、教育学科での4年間があるからです。どうか教育学科のみなさまも体調を崩さぬようお過ごし下さい。

62回生 海野 沙希(神奈川)



◆ごぶさたしています。澤本新会長を中心に益々発展されますようお祈りしています。皆様によりしくお伝え下さい。

元教員 高山 博之(東京)

◆今、通信教育課程における「社会科公民科指導法」の授業を担当しています。限られた通信教育課程における実践的指導力形成を目指した「学びの場」を設定し「教材開発」「学習指導案作成」の時間をみつけて実践しています。

元教員 佐島 群巳(東京)

## クロスワードパズル

二重線枠の文字を組み合わせてできる  
3文字(漢字2文字)の言葉は?

### ヒント!

白い・黒い・細い・太い・かたい・やわらかい・・・  
いろいろあります。

#### <ヨコのカギ>

- 1 卯月を英語で。
- 4 □□相憐れむ。
- 6 楽曲を演奏する集団のこと。
- 7 人気のフィギュアはスケート競技のひとつですが、タイムを競うものは〇〇〇〇スケート。



#### <タテのカギ>

- 1 終わりのないこと。
- 2 バブル時代、ハリウッド映画の影響で流行ったといわれる、ビリヤードができるお店のこと。
- 3 ヴェルサイユ宮殿・マリーアントワネット・アームストロングなどから連想する名前といえば。
- 5 日本の約10倍の人口で、世界第2位の人口の多い国はどこ?

1		2		3
4			5	
		6		
7				

解答を同封のハガキに書いて送ってください

締め切り：5月10日(金) 必着

正解者10名に図書カードを贈呈します。  
(正解者多数の場合は抽選)

■前号の正解は<秀逸(しゅういつ)>でした

【当選者発表】(敬称略)

齊藤洋子(14)	三浦栄子(18)	日隈千恵子(24)
赤塚国子(24)	萩野厚美(25)	増山在子(27)
吉川珠美(28)	尾崎啓子(33)	井澤和美(55)
鈴木慶子(59)		



## 編集後記

◆今回、回生委員会からのよびかけがありました。が、「葦」の編集をする会報編集部員も募集中です。雑談から視野が広がることもあり、学年を超えた交流も魅力です。ぜひご一報を。

石井 美奈子(38回生)

◆東日本大震災から2年になりましたが、鮮明に覚えている事もあれば、少しずつ忘れてしまった事もあると思います。自分なりの復興支援は、かたちを変えながらも、ずっと続けていきたいと思えます。

大熊 智恵美(34回生)

◆ハガキコーナーに紹介されているだけでも11回生から62回生までの卒業生と元教員の方々と幅広い年代で「葦」を楽しんで読んでくださっていることがわかってうれしくなります。この喜びを皆さんと分かち合いたいです。ぜひ一緒に編集にご参加ください。

高橋 藤枝(23回生)

◆先日、1歳の孫のお供で近くの地域交流施設へ行ってきました。週に1度の遊び場広場への初参加です。子育て支援にシニアの活躍の場がたくさんあることを知り、定年後の選択肢の幅が広がります。

北島 幸子(23回生)